

人^{せい} 屍の禍福的運命

～ 完 ～

～ カトリックの教えによる人屍の禍福的運命(続) ～

Human Eternal Destiny

～ Part 5 ～

～ Catholic Doctrine of Human Eternal Beatitude or Perdition ～

霧 島 怜

Rei S. Kirishima

目 次

- 6. 「天国」又は「地獄」に趣いて生きる自由
- 7. キリストの贖罪的人屍, その復活とクリスチャン
- 8. 唯一神と人間の栄光

結語にかえて～「愛神愛人」と人間の永遠禍福

註

使用文献

Resume

6. 「天国」又は「地獄」に趣いて生きる自由

人が死んだらどうなるのであろうか。拒神拒仏論者や絶無論者の諸種が主張するように、人が死んだら今生の正邪と善悪の生き方と関係なくその身体が多種多様な変化を経て他物となり、その精神もいわゆる靈魂も解体され絶滅するのであろうか。唯一の神を何より敬愛し、自分の人屍を心身の誠実な辯道として生きようと努める者達が考えるように、神法的一端である因果法と業報法に遵じて今生における各自の正邪と善悪の生き方に相応しい死後の禍福的な境遇が得られるのであろうか。快樂主義者、勝手気まま主義者、責任放置主義者や神仏無関心主義者が何となく感じるように、今生における正邪と善悪の生き方と関係なく、死後皆は「天国」や「浄土」の如き境遇を得て再び好き勝手に生きることが出来るのであろうか。さらに、天皇制主義者、民族等の優越主義者、財宝や金銭の崇拜主義者、民族浄化主義者、侵略戦争を正当化し美化する者や宗教を商売道具とする者達、政教的又は経済的なテロを行なっている者達の「思忖」が死後も再確定されるのであろうか。自分たちの利害を国民の利害と見せかけ、自分たちの価値観を国民の価値観として報道し、自分たちの利益と優勢等を確保するために都合のいい法律を設定し、それに合わせて公私的な正邪・真偽・

善悪・利害・賞罰等を判定し、国際社会にまで押し付けている現代先進国の政経界の判断は各人の死後にも再確認されるのであろうか。第三以下の疑問は余りにも支離滅裂で途も轍もない見解として真面目な論議に値しないものである。一方、拒神拒仏論や絶無論の立場は一見に筋が通るようにみえるが、実はそこに神仏とその諸活動の誤解を初め、宇宙の我物事象の素晴らしい秩序、想像を絶する万物の美しさと豊かさ等に関する恐るべき無知と無関心が窺われる。さらに、自他の神格視錯誤の副果として絶対御命たる神仏の兇悪視、その恵愛的な活現の無視とその戒めの軽蔑が反宗教的な教育と非道徳的な風習として明らかに現れている。

神仏の実存、その存在様態と種々の活現について、道元禅師の仏性観を軸とした禅仏教と聖トマスの神観を枠組としたカトリックの理解を既に説示した。さらに、道元系の禅仏教が提唱する人格的命我とその死後、各人の今生における善悪迷悟と次生の禍福、死後を生きる人間的妙我とその貴賤の境遇、成仏又は地獄に趣いて生きる自由についても既に説述したのである。天国又は地獄に趣いて生きる自由について聖トマスを中心とした正伝キリスト教の見解を述べる前に、拒神拒仏論者と絶無論者が採っている立場の空白性と危険性を暴露するパスカル (AD.1623-1662) の「**人生最大の賭け**」話をここで再解説する。

先ず、唯一の絶対神が実存せず死後もないという想定を考えてみよう。この場合は神を信じて正しくて善く生きようと努める者達は長くても130年間苦勞し、空前絶後の存在を恵愛し、本来絶無たる桃源郷を求めるが、結局全ては無駄で勝手気ままに生きる楽しみと一時的な栄利を永遠に味わわないで死ぬ。と言ってもやはり人に対する慈愛の故に良識の後世で高く評価され、そして死が来れば良心の呵責なしに「絶無」に転じ、妄想していた神福の永遠参加も勿論得られないままで全てが終わる。一方、拒神拒仏論者と絶無論者は神法、道徳、天国や地獄等のような宗教的で馬鹿らしい妄想に一切捕われず、繫縛されないままで長くても130年間で自己本位、自己栄利や国家利益を最高の生き甲斐として生き、大得した後、生涯を通じて切望し楽しみにしていた「絶無」に死の瞬間に転じるのである。と言っても、彼らもやはり好き勝手な生き方の故に、特に似た者同志の怨みを買うことも多い。更に、「死」が彼らにとって最憎の天敵である。彼らは「死が人間の自然で必然的な帰結であって運命である」と頻繁で軽々しく言っているが、一生を通じて夜も昼も全霊全身を尽くして追求しながら崇拜してきた自己完成の夢、権力、栄利、財宝、快樂、国家、党、会社や家族の隆盛等も死と共に永遠に失うという想いに、本当に空しさと耐えがたい絶望感を覚えないであらうか。今度は神仏が実存し、死後も有ると想定して考えてみよう。この場合は正邪と善悪等を識別して愛神愛人や敬仏慈人の道を一生懸命に生きようとする者達は、この世において長くても130年間苦勞し、自己本位的な自己完成の夢、権力、栄利、財宝、快樂、国家、党、会社や家族の隆盛等のような現世的な価値を全く得られなかったとしても、来生の永遠慶福を確実に得ることになる。一方、拒神拒仏論者や絶無論者は二百年間を通じて病苦等の禍いを全く味わう事なく、恣に全世界の権力、栄利、財宝、快樂等を手に入れたとしても死んだら自分の生前悪行に対する神愛の不偏正義、又は仏慈と業報法の執行とその果報を絶対に免れない。何故かと言うと、唯一の神仏は人間が自己中心的に設定した秩序とその法律に従うのではなく、人間を初め万物は何れにせよ神仏

の秩序に従わなければならない。こうして、愛神愛人、敬仏慈人、敬天仁人や拝神施人の生き方に努めている者達だけではなく、種々多様な拒神拒仏主義者、神仏の冒瀆者、絶無主義者、快樂主義者、勝手気まま主義者、神仏無関心主義者、無善無悪主義者、天皇制主義者、選民神国主義者、民族浄化主義者、民族等の優劣主義者、戦争美化主義者、自国益最優先主義者、胎児他の無防備人命の殺害者、弱者の政経的搾取者、テロリスト、私利私欲追求主義者、自己本位主義者、財宝等の物質的価値の崇拝者、宗教濫用主義者、復讐合戦主義者、憎悪主義者、占術師や霊媒師他の如き者達も知っているか知らないか、好きか嫌いか、容認するか否定するかと関係なく、神仏の不偏で普遍的な秩序の外に出られない以上、死後も尚更その秩序に服従しなければならないし、その果報・賞罰を受け入れなければならないのである。では、**どちらの方が賢明な賭けをして真の夢の実現に近づいているのか。汝が誰の教行信証を信用し、自分の人魂の指導者と憧れにしているのか？**

聖トマスはアリストテレス、聖書と教父達を参考に正伝キリスト教、特にカトリックが唱道する人魂の不死不滅観を主として神学的と哲学的な立場から次のように説明する。先ず、人魂は始めを有する被造者としてその実存自体も死後の存続是非等の事柄も最終的に絶対神の完全に自由な意志に依存する以上、その実存等がいつ終末を迎えても不思議ではないと言う。しかし、被造者としての人魂が可変で可滅的であると言っても創造主によって人魂に賦与された徳力とその性能を察する限りにおいて人魂は本来、不死で不滅の人格者として創造されたと考えるのがより妥当であって、理に適う立場としてキリスト教以外にも広く認められている。聖トマスによると、人間が死ぬ時に人魂と肉体は分離した後、肉体は人間的な生命力とその諸性能を喪失し、天然本性に循じて万変を経て人体として崩壊し、徐々に異なるものに変化するのである。一方、人魂は肉体から離れた後でも動植物他の魂に変成しなければ輪廻転生もしない。そして、稟賦された本然性質に循じて人格的な靈魂として人格に固有な徳力性能を保持したままで神から頂く徳力に支えられて存続しながら、より高度な仕方と方便を用いて自らの天然徳力である靈知的認識とその性能を活用し続けるのである。それは何故かと言うと、物質的な要素を内包しない靈知的な人魂は物質的で感覺的な肉体とその器官に因って生起しない以上、肉体の解体と共に死滅もしないし、肉体とその感覺器官の変成や喪失に因って人魂は非靈知的な実有に転ずるのでもない。さらに、人魂は肉体と違って複合体、混合体や融合体でなければ分裂や分割出来るものでもなく、不可分的な単一者である以上、当然肉体から分離した後も解体したり溶化したり、多様化したり自分のクローンを生産したりする事が出来ないのである。人魂と物質的な人体との一体化が現世における人魂の自然で最善の存在様態であるが、現世を超越するあの世においては物質的で可滅的な肉体との組み合わせが最善な存在様態であるとは決して言えない。何故かと言うと、人魂は現世においても物質的、肉体的と感覺的な世界の束縛からの自由を頻繁に切望し、迷悟と善悪の道を歩みながらより優れた自己表現、より高度で確実に活動する意思とより慶福的な生活を切望して止まない。そして、各人の靈魂が神の肖像として創造されている以上、その肖像性の土台と普遍で最高の表現が有限の被造者である人魂の天然不死と不滅性よりも素晴らしい賜物はない。さらに、人魂の不死不滅性とその認識的な把握がなければ諸義人の正悟も善行も、愛神愛人の生き方も幸福の追求も、キリストの救いも最愛の相手を助けるため自命を捧げるのも無意味である。しかし、肉体を離脱した人魂は生前の諸行に順応して獲得し

た禍福的な境遇と関係なく、現世の物質的で感覚的な緊縛から解放されるお陰で各靈魂の天然徳力が表れ、その諸性能の本来精妙性と特別な才能の力量が露顕される。それによって人我は自らの生前諸行の誠心や邪心、正邪、善悪、正信や邪信、正見や邪見、愛憎等の記憶、現世現象界の有り様、それらの真価値とその意味および自分が置かれている新状況を完全に理解することになると考えられている。しかし、この世と違ってあの世では各人の生前諸行の正邪と善悪及び神恵に対する態度に遵応して人魂の貴賤的な境遇、禍福的な状況とそれらの度合いが決定される。そして、この新境遇と新状況があのお世における人魂の意思の新力量とその性能の範囲をも勿論決定する。かくて、新境遇を得た人魂は自分と同位あるいは自分より下位の存在、その境遇と状況を完全に知識することが出来るが自分より上位の世界をより正確、しかし不完全にしか理解する事が出来ないのである。つまり、救われた至福者は自分達と同じ至福者及び救われていない人魂の境遇とその状況を完全に理解し認識するであろうが、自分の境遇貴勢に応じて天使達の世界と神様の世界をより正確、しかし不完全にしか知識する事が出来ない。一方、救われていない、例えば兇悪者の人魂は自分達と同じ又は下位で救われていない不幸者の人魂の境遇とその状況を完全に理解し認識するであろうが、自分の境遇の卑賤位に応じて天使達の世界をちょっとしか理解出来ないし、神の存在と全能で不偏の正義以外の神性内容を全く知識する事が出来ないのである。さらに、死者の人魂は神からの知的注入、現世からあの世に新しく渡った人魂、天使や悪魔又は自らの知識の新力量に因ってこの現世諸相をほぼ完全に知識し得るが、神法の定めで現世の人間界に干渉することが全く許されていない⁽¹⁰⁶⁾。この不干渉とその正当性を裏づける様々な理由が考えられるが、もし現世の人間界における上位界、この場合は死者の靈魂界の干渉が許されたならば、我々の**人間性の根本性能である人格的な意思、選択、決定と行動の自由を束縛**することに成りかねないからであると思われる。我々一人一人の来生の禍福は唯一の絶対神の恵愛と正義の一端である業報法に順従して、我々一人一人の正邪、善悪や私利利他の自由決行、総じて愛神愛人又は拒神拒愛の生き方に因ってしか得られないと定められているのである。

先ほどに概説した人魂の死後境遇に関するカトリックの教理を裏づけるために、非常に重要で最高の信憑性を誇る証言として聖トマスはキリスト御自身が語った「貧乏のラザロと金持ち」の話しを採りあげるのである。キリストは人間の死後の運命とその現実をこう説明する。

『緋色布や亜麻布を着て日々おごり暮らすある金持ちがいた。またラザロという名の貧乏人がいた。全身腫れ物にうみただれた彼は金持ちの門前に横たわって、その食卓の残飯で飢えをしのぎたいと思っていた。その上、犬が寄ってきて彼の腫れ物を嘗めていた。この貧乏人は死んだ時、天使達に連れられ、アブラハムのふところ〔つまり天国〕に入った。金持ちも死んで葬られた。死人の国〔つまりこの場合は地獄〕へ行った彼は苦しみの中から目をあげ、アブラハムとそのふところにいるラザロを遙に眺め、「父アブラハムよ、私を悲み、ラザロを送ってください。私は炎の中でもだえ苦しんでいます。彼の指先を水にぬらして、私の舌を冷やさせて下さい」と叫んだ。だがアブラハムは、「子よ、あなたは生きている間によいものを受け、ラザロは悪いものを受けていたのを思い出せ。いま彼はここで慰めを受け、あなたはもだえ苦

しんでいる。そればかりか、私たちとあなたたちの間には大きな淵があって、ここからあなたたちの方へ渡れず、そちらからこちらに来ることも出来ぬようになっている」と答えた。すると金持ちはまた、「それなら父（アブラハム）よ、お願いですから、私の父の家にラザロを送って下さい。私には五人の兄弟がいます。彼らもこの苦しい場所に来ないように戒めて下さい」と言った。アブラハムは、「彼らにはモーゼと〔神の啓示を伝える〕預言者がある。それを聞けばよい」と答えた。金持ちは、「いえ、父アブラハムよ、もし死者の中から誰かが兄弟の所に行けば、彼らは悔い改めるでしょう」と言ったが、アブラハムは、「モーゼと預言者〔が教えていること〕を聞かないなら、死者の中から甦る人がいても彼らは聞き入れない」と答えた』⁽¹⁰⁷⁾。

要するに、正伝キリスト教の哲学的及び神学的な人間論の権威である聖トマスによると、この世を去った人魂は靈的、つまり超現象的な身体を一時的に享受し、生前中に神の恩恵に協力したそれともしていなかったか、そして日々の生き方において自らの知志的な自由を如何に活用していたかに因って、人魂の死後禍福とその境遇の貴賤が自然で必然的に決定されるのである。つまり、現世の肉体を離れた人魂は愛神愛人の道を誠実に歩んでいた者達のために神が準備された永遠の無苦無悪と慶福増大の境遇を獲得し、「天国に昇る」。一方、神とその恵愛を軽蔑し、愛神愛人の道に悖って生きた者達のために神が準備された永遠の苦痛、悶絶と憎悪の境遇を獲得し、「地獄に落ちる」。そして愛神愛人の道を拒絶しなかったが誠実に歩まなかった者達を浄めるために神が一時的な浄苦浄悶の境遇を準備した。彼らは生前の軽い罪悪や善行の怠りの全てを償った後、必ず天国の慶福を得るという立場は正伝キリスト教の人間観の通説である。しかし、神は人の誠心誠意とそれに基づく自由決行に反して人を無理矢理に天国や地獄に送り込むという事を絶対に勘違いしてはいけない。我々一人一人が自由意思と自由活動をもって全生涯をかけて、昼も夜も自らの手で天国の至福や地獄の苦悶を確実に少しずつ準備している。更に、全身全霊の諸活動も又、目茶苦茶で支離滅裂な果報を産み出すのではなく、その果報は神が定めた「因果法」と「業報法」に厳順すると忘れてはならないのである⁽¹⁰⁸⁾。よって、生前で愛神愛人の生き方を貫いた者は永遠地獄の苦悶ではなく、愛神愛人の行いに循じた**愛神愛人の永遠果報**、つまり神福参加を享受するであろう。一方、愛神愛人の教行信を軽蔑して拒み、生前で私利私欲を追求していた者は自然で必然的に愛神愛人の永福ではなく、**拒神拒愛の報い**を受けるであろう。かくして、唯一神を愛し、極貧の者達のために生涯を捧げ尽くしたマザー・テレサと、国際法廷によって裁かれたと裁かれなかった万代万民の戦犯者、彼らを神格化したり、英霊視したりして拝む者、世界制覇政略の頭脳であるペンタゴンの実力者、貧国弱者を陰湿的に搾取する大国の権力者や政経的テロの世界的中心部とその諸支局の者達は死後も同じ報いを受けるはずだと考えるのは良心の常識であろうか。唯一の神を敬愛することと戦犯者や財宝金銭を崇拜すること、自国民を防衛する軍の行為と自国覇道の政策を遂行しながら他国を侵略し、無実な庶民まで無差別に殺害する軍の行為、病人を治療する医師の行為と元気で無防備な胎児を親の無責任で墮（殺）す医師の行為の価値とその評価が死後界においても同じであろうか。正伝の仏教もキリスト教も、ヒンズー教もイスラム教も、道教も儒教も上記の行為群の中に正行と邪行、善行と悪行、正義と不正とをはっきり識別するのである。ところが、現代の拒神拒仏主義者、絶無

主義者、自己本位主義者、財宝等の物質価値の崇拜者、宗教濫用主義者、占術師や霊媒師達はどうだろうか。靖国神社の管理者達とその諸信奉者はどうだろうか。自分の愛犬等のペット維持費として毎週数百や数千ドルを使いながらアフリカ等に毎日餓死したり不治の病に苦しんだりする子ども達に対して一念の慈しみどころか彼らに全く興味のない世界中の億万長者、快樂主義者、芸能アイドルの崇拜者と種々の放蕩者はどうだろうか。

人死には正しい生き方と死に方があれば正しくない生き方と死に方もある。善き生き方と死に方があれば悪き生き方と死に方もある。慈悲の生き方と死に方があれば搾取の生き方と死に方もある。博愛の生き方と死に方があれば暴憎の生き方と死に方もある。正信誠意の生き方と死に方があれば迷信と立て前の生き方と死に方もある。自他をイカス生き方と死に方があれば自他を殺傷する生き方と死に方もある。これこそ、無償敬愛と命の創造主は万代万人の靈魂に賦与された禍福的な性向であり、永遠の運命であるが、その実現は各人が自ら「神愛の御旨に従って生きるかいなか」という自由な決行に委ねられているのである。

7. キリストの贖罪的人死、その復活とクリスチャン

女から生まれた者の中で、唯一神の御独子であるイエズス・キリストと「世尊」と称せられる釈迦牟尼を越える者がいなければ、人類の文化、特に人心の精神的な発展と永福により強大で慈善的な影響を及ぼした者もない。イエズス・キリストと釈迦牟尼仏と肩を並べる者がいないと言えども、彼らほど人々の賛否と愛憎を引き起こした者もない。それだけではない。仏教徒とキリスト教徒のほとんどは長い間、釈尊が示した「見仏慈人」の生き方とキリストが示した「愛神愛人」の生き方の類似性よりも相互排他的な道として受け取られて来たのである。そして、仏教の高僧達とキリスト教の司教達と枢機卿達の多くは、釈尊とキリストおよび彼らの道に憧れて誠実に生きていた道元、親鸞、良寛、アッシジの聖フランシスコ、聖トマス・アクィナスや聖フランシスコ・ザビエル他のような諸聖哲に倣って生きるよりも経典、聖書とその正伝を自分たちの都合、精神的霸道、権力と様々な私利私欲の追求を正当化する方便として利用してきたのである。世界中の仏教の高僧とキリスト教の司教や枢機卿の大多数は裕福であり、各地の世俗政権の実力者と手を組む事によって社会内の貧富差等の不正を事実上で容認し、政経的な搾取等の悪の拡大に貢献し、釈尊やキリストの教示とその魅力を水増しするのである。ところが、仏道やキリスト教の誠実な信奉者にとって「釈尊」とは、「キリスト」とは一体どんな存在であるのか。正伝仏教の大物の一人である道元禪師が孝烈に憧れ、特別に崇敬していた「釈迦牟尼仏」の天然性質、その人死の役割と人類教化への貢献について『釈尊と正覚者達』という章の中で述べた。ここでは、カトリック信徒が尊愛し、特別に崇拜する「イエズス・キリスト」の本然性質、その人死の役割と人類救済の実現について、新約聖書と聖トマスの教述を基に独自に説示する。

本題に入る前に言うておかなければならないことがある。イエズス・キリストの本然性質を論究する「キリスト論」が「仏陀論」と同じように、ラスヴェガスのカジノ、世界中の皇宮や国防省、政経医界の根回し室、商売宗教の教祖や会長のお宮、芸能プロダクション室や大学の宗教哲学相対

総合研究室ではなく、キリストの全人死、特にその愛神愛人の教行証、無我的で利他的な活動、十字架上の贖罪的な死、復活、昇天と降誕の内実を踏まえて、クリスチャンへの強烈な迫害、逆境と信仰生活の中で芽生え、万民二千年の歴史試練を通じて熟慮され、形成された立場であるということ忘れてはならない。そして、キリストが示す福音は今も健全な諸科学の成果、例えば「愛神愛人の素晴らしさ」が臨死医学、犯罪学、教育学、社会学、福祉学等によって裏づけられている。更に、誠心誠意をもって「^{ひざまず}跪き」、自他の人死、その禍福的な運命と掛け替えのない価値を真面目に考える者にとって、イエズス・キリストの全生涯、特にその教行、受難、贖罪的な死、復活、昇天、万物完成、万人を公審判するためのキリスト再臨の約束が善く正しく生きるための励みであり、救いの前触れであり、神福参加とその栄光の兆しである。一方、無限の恵愛と慶福等を本性とする唯一神を認めず、その御心と秩序に逆らって生き、自他や財宝等の有限価値を神格化して愛する者にとってキリスト、その道およびその教えを生きようとする人々が暴憎、暴怒や嫌悪の対象である。キリストは死ぬ前に最後の晩餐の席でこう話していた：

『私はこう話したのは、あなたたちをつまずかせないためである。人々はあなたたちを会堂から追い出すであろう。そればかりでなく、あなたたちを殺す人が……神に仕えていると思う時が来る。彼らがそうするのは、父をも私をも知らないからである。…兄弟〔兄妹〕は兄弟を、父は子を死の手に渡し、子は親に逆らい、親を死なせるだろう。あなたたちは私の名のために全ての人から憎まれる。だが終わりまで耐え忍ぶ者は救われる。…私は友人であるあなたたちに言う。体を殺してもそれ以上何も出来ぬ人々を恐れるな。あなた達の恐れねばならぬのは誰かを教えよう。殺した後ゲヘンナ（地獄）に投げ入れる権威あるお方を恐れよ。…私は言う。あなたたちも悔い改めないなら、皆同じように滅びるだろう。…〔そして最後の公審判の時に「愛神愛人」の道を歩んで生き〕。〔た者とそうでない者の運命についてキリストはこう語る〕。世の終わりには、…天使が現れ、義人と悪人を分け、悪人を燃えさかるかまどに投げ入れる。そこには嘆きと歯ざしりがある。…人の子〔つまり世界の王たるキリスト〕はその栄光のうちに多くの天使を引き連れて栄光の座につく。そして、諸国の人々を前に集め、…右にいる人々に向かい、「父に祝された者よ、来て、世の始めからあなたたちに備えられていた国を受けよ」。…又王は左にいる人々に向かって言う、「呪われた者よ、私を離れて悪魔とその使いたちのために備えられた永遠の火に入れ』』⁽¹⁰⁹⁾。

キリストは人類の歴史の中で初めて無償で無我的な愛を人死に明るい展望をもたらす原動力だけではなく、宇宙万物の存在由来、特に人類の存在、調和的で健全な発展とその永福の由縁として示したのである。キリストによると、唯一神は100%に自由で無償の恵愛の故に宇宙とその万我物を創造し、慈愛の摂理をもって常に養い生かす。さらに、唯一神は同じ愛をもって御自分にかたどって人間を創り、各人の愛神愛人の生き方に順応する永遠禍福の獲得を各人の自由意志とその努力に委ねた。同時にこの神は世界の始めから義人のために準備された神福参加を一人一人が獲得出来るために恵愛の様々な表現をもって万代の聖哲を通じて人々を導いて来たのである。そして最後に、

『神は、その独り子を与えるほどこの世〔万国万民〕を愛された。それは、御子〔とその啓

示] を信じる者が一人も減びることなく、〔御子によって贖われて〕永遠の命〔の慶福〕をえるためである。神は独り子を世にお遣わしになった。それは、世を裁くためではなく、御子を通して世が救われるためである』⁽¹¹⁰⁾。

福音書、使徒パウロの諸書簡、教父達の論究とカトリック神学による⁽¹¹¹⁾と、唯一の神が人類を救うために派遣した「御子」とは、神の神聖で神秘の極まりない三位一体的神性の一つの神格者である御子がイエズスというユダヤ人としてこの世に生まれた者である。彼はローマ皇帝アウグストゥスの治世時に乙女マリアからベツレヘムで生まれ、ピラトがユダヤの総督であった時に活動し、エルサレム郊外にあったゴルゴタ丘で十字架につけられて死に、三ヶ日目に復活し、四十日後に昇天された御方である。このイエズスは愛神愛人の道を全うし、十字架上で無罪無実の死によって全人類の諸罪惡を贖い、死者の中から〔「再生」でなければ臨死体験でもない〕復活することに因って人命の天然的永存性を立証し、昇天によって万代万人の心奥に刻み込まれている永福の切望とその可能態を実現させた匹儔なきお方である。私は理解している限りにおいて、カトリックの教理によると、イエズス・キリストとは、日本報道の諸番組に出演する「超能力者」、「霊能者」、「霊媒者」や「占術者」他のべてん師達のような者でなければ、神に変成された人間でもなく、人間に変成した神祇、天使や鬼でもない。さらに、イエズス・キリストとは、三位一体中の御子の神格とイエズスという歴史的な個人の間性を持って来て、結合したり混合したり、統合したり融合したりする事に因って生出した半神半人や現人神的な者でなければ神性と人間性の相違を除去したり排除したりする新結合体もしくは新個でもない。又、イエズス・キリストとは、神性と天使性の結合体等ではなければ、神性と他の生き物との合一体等でもない。イエズス・キリストとは本然性質において (*in natura Divina*) 「父なる神」と「聖霊なる神」と優劣や増減の面がなく、父と聖霊とに等しい神格者である。それと同時に、原罪、罪惡と諸惡趣の影を除外して、キリストは万代万人と等しい真で個性的な人格者である。「御子の受肉」 (*Incarnatio vel incorporatio Dei*) という存在様態は人間にとって永遠に究め尽くせない神秘であるが、敢えて言うと、イエズス・キリストとは、御子の全神性がイエズスの個性的な全人格をして実存し、人格的靈魂、心身とその諸徳力と性能の分離、障害や不和の全くない単一つの位格者 [*unio personalis, unitas et unitas personae Christi*] として活動している真の神であり、真の人間でもあると観ることが出来る。

新約聖書とその正伝によると、「救世主」と称せられるイエズスは三十三年間、全霊全身を尽くして父なる神を愛し、終生誠実、無我で利他的、断悪と赦罪の隣人愛の道を歩み、わずか三年間だけその道を公然と教え実証したのである。キリストが教えた博愛、行なった慈愛、証明した「父の恵愛」および愛神愛人の正道について想像を絶するほど書物が論著されたにも拘らず、「愛する」という語より誤解されて来た概念がなければ、「愛する」という行為より悪用されている行動や活動もないのは事実である。ここで不要な解釈を増やすよりもキリストの福音、つまり「**神福参加へ導く教行信証**」の心髄と見なされる幾つかの教説を選び、誤解され易い表現だけに私註を付けながら原文のままで引用し、キリストとその弟子達、特に愛弟子ヨハネと使徒パウロの心を味わって行きたい。

人が永福を得るために守らなければならない最重要な掟とは何か、と律法学者はキリストに尋ねた時にキリストはこう答えた：

『「全ての心、全ての霊、全ての知恵をあげて、主なる神を愛せよ」。これが第一の最大の掟である。第二のもこれと似ている。「隣人を自分と同じように愛せよ」。すべての律法と預言者はこの二つの掟による。[マテオ, 22.34-40・マルコ, 12.28-34・ルカ, 10.25-28, 18.18-20].

又別の時に敵への愛についてキリストはこう言われた：

『「目には目を、歯には歯を」と教えられた。しかし、あなたたちは敵を愛し、自分を憎む人に善を行ない、自分を呪う人々を祝し、自分を讒言する人のために祈れ。…あなたたちは他人からして貰いたいと思うことをそのまま他人に行なえ。自分を愛してくれる人を愛して、何の報いをえられよ。悪人すら自分たちを愛してくれる人を愛する』。[ルカ, 6.27-32・マテオ, 5.38-45].

聴衆の機嫌を窺わなかったキリストは公正で誠実、無我で利他的、終生誠実な生き方を賞讃する一方、偽善的で悪徳の生き方を咎め、そして、この世でなければ必ず来生において神の正義と善悪の報いがあると明示して、有名な「山上の垂訓」の中でこれをこう予告する：

『心の貧しい〔つまり自分の微力を知らない無我の〕人は幸せである、天の国は彼らのものである。柔和な人は幸せである、彼らは地を譲り受ける〔つまり真の権威を有する〕であろう。悲しむ人は幸せである、彼らは慰めを受けるであろう。正義に飢え乾く人は幸せである、彼らは満たされるであろう。心の清い人は幸せである、彼らは神をみるであろう。平和のために励む人は幸せである、彼らは神の子らと呼ばれるであろう。正義のために迫害を受ける人は幸せである、天の国は彼らのものである。私のために人々はあなた達を罵り、あるいは責め、あるいは数々の讒言を言う時、あなたたちは幸せである。喜びに喜べ、あなたたちは天において大きな報いを受けるであろう、先人の預言者達も迫害された。[マテオ, 5.2-12・ルカ, 6.20-24]……だが富む者は災いである、あなたたちはすでに慰めを受けたから。今飽き足りている者は災いである、あなたたちは飢えることになるだろうから。今笑う人は災いである、あなたたちは泣き悲しむだろうから。皆からほめそやかされる時、あなたたちは災いである。先祖は偽預言者に対してそうしたのだった』。[ルカ, 6.264-26, 11.33-52・マテオ, 23.13-16]⁽¹¹²⁾。

正又は邪、真又は偽、誠又は不誠、善又は悪と私利又は利他を追求する生き方によって得られる永遠の禍福とそれを確定する最後の公審判についてキリストはこう語っている：

『人の子〔つまりキリスト〕はその栄光のうちに多くの天使を引き連れて光栄の座につく。そして諸国の人々を前に集め、…右にいる人々に向かい、「父に祝せられた者よ、来て、世の始めからあなた達に備えられていた国を受けよ。あなた達は私が飢えていた時に食べさせ、乾いている時に飲ませ、旅の時に宿らせ、裸だった時に服をくれ、病気だった時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれた」と言う。すると義人達は答えて、「主よ、いつ私たちはあなたの飢えていた時に食べさせ、乾いている時に飲ませ、旅の時に宿らせ、裸の時に服をあげ、病気の時や牢に入られた時に見舞ったのでしょうか」と言う。王〔たるキリスト〕は答える、「誠に私は言う。

あなたたちが私の兄妹であるこれらの小さな人々の一人にした事は、つまり私にしてくれた事である」、又王は左にいる人々に向かって言う、「呪われた者よ、私を離れて悪魔とその違い達のために備えられた永遠の火に入れ、あなたたちは私〔つまりキリスト〕が飢えていた時に食べさせず、渇いている時に飲ませず、旅にあった時に宿らせず、裸だったのに服をくれず、病気の時や牢にいた時に見舞いに来なかった」。その時彼らは言う、「主よ、あなたが飢え、渇き、旅に出、裸であり、病気になり、牢に入られた時、いつわたしたちが助けませんでしたか」。王は言う、「誠に私は言う……これらの小さな人々の一人にしなかった事は、つまり私にしてくれなかった事だ」。そして、これらの人々は永遠の刑罰を受け、義人は永遠の生命〔の至福〕に入るのであろう。〔マテオ、25:31-46〕⁽¹¹³⁾。

眼前に迫る受難と十字架上の死を前にして、後世が「最後の晚餐」と名づけた弟子達との夕食の席でイエズス・キリストは宇宙万有の創造主であり、自分の父である神との永遠で極めて親しい関係を初め、自分の人甞の意味、特に生涯を通じて示してきた福音と真の愛の意義についてこう語る：

『私は新しい掟を与える。あなたたちはお互いに愛し合え。私があなたたちを愛したようにあなたたちもお互いに愛し合え。互いに愛し合うならそれによって人は皆、あなたたちが私の弟子である事を認めるであろう。…私の父の家〔つまり天国〕には住处が多い。…私はあなたたちのために場所を準備しに行く。…私のいるところにあなたたちも来させたいからである。…あなたたちは私を愛するなら私の掟を守るだろう。…そして私は父に願おう。そうすれば父はほかの弁護者をあなたたちに与え、永遠に共にいさせて下さる。それは真理の霊〔つまり聖霊〕である。…私の掟を保ち、それを守る者こそ私を愛する者である。私を愛する者は父にも愛され、私もその人を愛して自分を現す。…私を愛する者は私の言葉を守る。又父もその人を愛される。そして私たちはその人のところに行ってそこに住む。私を愛さない人は私の言葉を守らぬ。…私はあなたたちに平和を残し、私の平和を与える。私はこの世が与えるようにしてそれを与えるのではない。心配することはない、恐れることもない。「私は去って又帰ってくる」と私が言ったのをあなたたちは聞いた。…父が私を愛されるように私はあなたたちを愛した。私の愛に留まれ。私が父の掟を守り、その愛に留まったように、私の掟を守るなら、あなたたちは私の愛に留まるであろう。…友人のために命を与える以上の大きな愛はない。私の命じることを守れば〔その人は〕私の友人である。これからもう私はあなたたちをしもべとは呼ばない。…あなたたちを友人と呼ぶ。私は父から聞いたことをすべてあなたたちに知らせたから。…この世があなたたちを憎んだとしても、あなたたちより先に私を憎んだことを忘れてはならぬ。…彼ら〔つまりキリストとその道を憎む世〕が私を迫害したなら、あなたたちにも迫害を加えるだろう。…私を憎む者は私の父をも憎む。…誠に誠に私は言う。あなたたちは泣き悲しみ、この世は喜ぶだろう。そうだ、あなたたちは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。…私は父から出て世に来たが、今や世を去って父のもとに行く。…私は一人ではなくて父が共にまします。…勇気を出せ、私はこの世に勝ったのだ。…父よ、時が来ました。あなたの子に栄光を与え給え。子があなたに栄光を帰するように。…父よ、この世が存在するより先に、私があなた

のもとで有していたその栄光をもって、今私に栄光を現わして下さい。…私は彼ら〔弟子達〕のために祈ります。この祈りはこの世のためではなく、あなたが与え給うた人々のためであります。…聖なる父よ、私に与えられたあなたの御名において、私たちが一つであるが如く、彼らもそうなるようにお守り下さい。…又彼らの言葉によって私を信じる人々のためにも祈ります。…あなたが私を遣わし、私を愛されるように、彼ら〔つまり愛神愛人道を歩むクリスチャン〕をも愛しておいでになることを、この世に知らせるためであります。父よ、あなたの〔私に〕与え給うた人々が、私のいる処に私と共にいることを望みます。』〔ヨハネ、13³⁴-17²⁴まで〕。

ユダヤ教の最高裁の『お前は神の子、救世主か』という質問に対して『はい、その通りです』と答えたイエズスが死刑に当たるということで当時ユダヤで死活の最高権をもっていたローマ総督ピラトの手にわたされた。ピラトは『私はこの人に何の罪を見つからない』と起訴した側の前にも公にキリストの無罪と無実を明言しながらも彼を十字架の刑に処する。十字架上に死んでいるキリストの姿を自分の目で眺めた者はキリストがその時に示した「愛」についてこう伝えている：

『髑髏〔ゴルゴタ丘〕という所に着くと、イエズスを十字架につけ、悪人の一人をその右に、一人をその左につけた。イエズスは「父よ、彼ら〔つまりイエズスを死刑に処じた者達〕をお赦し下さい。彼らは何をしているかを知らないからです」と言われた。…人々はそこに立って見ていた。〔ユダヤ教の〕頭達は、「この男は他人を救った。もし神のキリスト〔つまり世に来るべき救い主〕、選ばれた者なら自分を救え」と言った。兵卒達も彼を嘲弄し、近寄って酒を差し出し、「もしユダヤ人の王なら自分で自分を救え」と言った。…十字架に付けられた悪人の一人はイエズスに「あなたはキリストではないか。では、自分と我々を救ってくれ」と言った悪口を浴びせたがもう一人の方は彼を押し止め「お前は同じ刑罰を受けながらまだ神を恐れぬのか。我々は行なったことの報いを受けたのだから当然だ。だがこの人は何の悪事もしなかった」。そして、「イエズス、あなたは王位を受けて帰られる時、私を思い出して下さい」と言った。イエズスは「誠に私は言う。あなたは今日私と共に天国にいるであろう」と言われた。』〔ルカ、23³³⁻⁴³・マテオ、27³³⁻⁵⁶・ヨハネ、19¹⁷⁻²⁵・マルコ、15²²⁻⁴¹〕。

初代キリスト教の迫害運動の先頭に立ち、後に改心してキリストとその教会の大弁護者となったパウロはこの世において各人にとって一番頼りとなるのは正信、希望と愛であると主張する。そして、そのうちに永遠来生に及ぶのが「愛」だけであると言う。使徒パウロによると、愛が永遠である故に、人生の最高で最善の生き方の原動力であって死を越える一番偉大な徳であると教示する。

『愛は寛容で、愛は慈悲に富む。愛は妬まず、誇らず、高ぶらぬ。非礼をせず、自分の利を求めず、憤かず、悪を気にせず、不正を喜ばず、真理を喜ぶ。全てを赦し、全てを信じ、全てを希望し、全てを耐え忍ぶ。愛は何時までも絶えることはない。…今あるものは、信仰と希望と愛の三つである。その内で最も偉大なものは愛である。』〔1コリント人、13⁴⁻⁸〕。

キリストの死後に弟子達を初め、使徒パウロも正信に基づく無我的な愛神愛人の道をクリスチャ

ンの生き方の基本原理とし、ローマ帝国の首都に新しく設立された共同体への書簡の中で真の愛の様々な側面についてこう述べている：

『愛には偽りのないようにせよ。悪を憎み善に親しめ。兄弟〔と姉妹〕愛をもって愛し合い、お互いに競って尊敬し合え。勤めのことはゆるがせにせず、熱い心をもって主〔イエズス・キリスト〕の奴隷となれ〔つまりキリストの教えを完全に生きる〕。希望の喜びを持ち、患難に耐え、祈りに倦まず、聖徒の必要を補い、旅人への愛はねんごろであるように努めよ。あなたたちを虐げる人を祝福せよ。祝福して呪うな。喜ぶ人とともに喜び、泣く人と共に泣け。互いに心をついにせよ。高ぶったことを望まず、低いことに甘んじ、自分を知者だと思ふな。誰に対しても悪に悪を返すな。全ての人の中で善い事を行おうと努めよ。出来れば全ての人と平和を保て。愛する者よ、自分で復讐するな、却って神の怒りに譲れ。「主〔なる神〕は言われる。仇は私がとる、報いるのは私である」と記されている。むしろ、敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。こうしてあなたは彼〔つまり敵〕の頭の上に燃える炭火を積む。悪に勝たれるままにせず、善をもって悪に勝て』。〔ローマ人、12⁹⁻²¹〕⁽¹¹⁴⁾。

唯一神の全面的に自由で無償、100%利他的な寵愛を機縁とする「神の宇宙万有とのかかわり」、取り分け人間の創造とその救済計画において、キリストの登場、特に十字架上の死、復活と昇天は全人類の天然にして禍福的な運命を明確にし、その二者択一性に信用出来る決定的で歴然たる証拠を提供したのである。

人が迫ってくる死を全身全霊で感じ取り、その不可避的な到来を眼前にする時は野球場やオリンピック・スタジアムでの感激の時でなければ、皇宮、総理邸や大統領邸での晩餐会中での最高権力者の自己陶醉のような時でもない。死を迎える者には恰好つけがなければ見栄の影もないとアウシュヴィッツ、ダハウ、トレンブリンカ、マイダネック、南京、広島、長崎、ベトナム、カンボジア、コンゴ、イラク、ロシアや中国革命等の犠牲者が、彼らを否定したり、国家間外交のゲームの対象にしたり、彼らの死を嗜む者達を英霊化したり、その時代を美化したりする現代人に無言で語る。全身全霊を投じて愛神愛人の道を進み、何時も本音を語り、『何の悪事をしなかった』にも拘らず十字架につけられ、迫ってくる死を前にし、自分を十字架の死に処せられた責任者を思い出して『父よ、彼らをお赦し下さい』と神に祈り、同じ処刑を受けて悔い改める悪人に対して、『誠に私は言う。あなたは今日私と共に天国にいるであろう』と約束するキリストが我々に教えた「真理」とは？ さらに、社会的な拒絶と精神的な寂しさの中で『エリ(エロイ)、エリ(エロイ)、レマ、サバクタニ。即ち、神(主)よ、神(主)よ、どうして私を見捨てたのか』と訴えた直後に心身最後の力をしぼって、『父よ、私の霊を御手に委ねます』⁽¹¹⁵⁾と大声で叫んで死んだ。イエズス・キリストをどうして信用出来ないのか。自讃自力に陶醉して自分の栄光のために他人の命まで犠牲にしながら自家財宝を増加している万国の戦犯者、億万長者と政治家が言うことをどうして信用出来るのか。都道府県と市町村、国の内外で進歩と地上の楽園を約束するが、実際に貧富の差だけを拡大する諸官僚と役員達がどうして信用されているのか。民族や国民の差別観、隣国民の蔑視や戦犯者崇拜の上に自国の「誇り」を確立しようとする神国主義、天皇制や似非民衆主義の支持者がどうして信用

されているのか。他国の制覇を目的とする自国の武装と利益のために莫大な金額を費やすが自国の利益のない所で何千人の子供たちが毎日餓死に瀕してもびくともしない大統領達や総理大臣達の言葉がどうして信用されているのか。正邪と善悪を識別せずに戦犯者を正当化し崇拝する一国の総理がどうして信用され高い支持を受けているのであろうか。どんなに好き勝手に自己本位的な生き方をしても神前、仏前又は教会等で結婚式やお葬式を挙げれば、慈愛限界のない神や仏がお布施の金額に合わせて今生の祝福や来生の幸福を約束する神職、僧侶、牧師や神父達がどうして信用されているのであろうか。だが、キリストが示した「愛」を拒み、彼を信用せずに嘲弄する社会は何れ弱者食肉の社会になる運命を突走っている。

では、キリストを全面的に信用し、全霊全身を挙げてその道を歩もうと努める者にとってキリストの死、その復活と昇天とは如何なる意味を持つ出来事であるのか。ここも以前の如く福音書、使徒教会の正伝、教父達と特に聖トマスの見解を拠所とし、出来るだけ忠実にそれらの意味を解説する。

十字架上の死。キリストの死が神の自由で無償と同時に理に適う恵愛の最高表現であり、そうした愛を由縁とする人類の救済計画実現の際立った証拠である。さらに、キリストの使命、誕生、愛善的教行証と唯一神の御独り子としての自己認識を考えると、十字架上の死が三位一体的な神による人類救済の決定的な行為である。神の御独り子であると同時に罪を除いて真の人間でもあるキリストは至聖で恵愛等の極まりない神に対して誠心誠意の全生活、特に自命の犠牲をもって人類に代わって、全人類の諸罪悪を償い、その罪科を贖ったのである。そして又、父から与えられた人々使命の服従的な遂行、特に自命の犠牲によって人類の原罪から切断され、そのまま放置されていた神と人間の信頼関係を修復し、父なる神と人類とを和解させた。それによって、罪悪を自ら悔い改め、愛神愛人の道に励む全ての人々に神福参加、つまり天国への門を再開したのである。しかし、人類諸罪罰の償贖と神との和解を成し遂げるためにどうしてキリストが死ななければならなかったのか。キリストは本当に万人の罪を贖い、人間を神と和解させ、本当に皆に永福の門を開いたのか。言い換えれば、キリストの服従、特に贖罪的で犠牲的な死による人類の赦罪と救いとは如何なる現実であらうか。

始祖の原罪を初めとするあらゆる人間的な罪悪の原因を問い詰めて観ると、罪悪とは聖性極まりのない絶対神の恵愛、最高で不可謬な叡智、その御旨とその表現である秩序や掟の否認、拒絶、軽視や軽蔑である。要するに、人が罪を犯す時に、その自由意思と悪意の度差があるにはあるが、根本的に人は絶対神に対して、「**お前よりも私の方が賢い、正邪・善悪・真偽・貴賤・禍福等の秩序を決めるのは私である**」と唯一神の上に自分を位置づける「**錯覚的で傲慢の極まりない自己神格視**」である。一方、犯罪者が秩序を認めるか認めないか、好きか嫌いか関係なく、絶対で万物の普遍道理である因果法と正義（つまり業報法）によると、あらゆる罪悪の刑罰も賠償も犯罪者の身分と罪悪認識の度合いだけではなく、犯罪の行為、被害者とその位に順応しなければならない。よって反神的な犯罪は被造物である人間だけの力で永遠に償う事が出来なければ、その罪科を贖う事も不可能である。しかし、神は不可解な恵愛と慈悲をもって人類の救済を決定し、御子の派遣、彼の人々と特にその受難をもって万代万人の罪悪を赦し、人類が受けるべき罪科、つまり悪行の応報を御子

たるキリストが人類に代わって贖うことに因って人類の救いを成し遂げたのである。こうして、永遠無限の神の永遠無限の御独り子でありながら個人として微罪もない人間であるイエズス・キリストのみは全人類に代わって、生涯を通じて父なる神のみ旨に従って自分の使命、つまり教行信証と人類の救済に全身全霊を投じたのである。彼はいつも「父のみ旨を行い」、ゲッセマネの園で逮捕される前に、『汗は血のしずくのように地に落ちた』ほど来たる苦痛と死の恐怖に怯えながら、『父よ、御旨ならば、この杯〔十字架上の死〕を私から遠ざけて下さい。しかし、私の意のままではなく、あなたの御旨のままにして下さい』と熱心に祈った。そして、十字架の上で心身共に疲れ果てて息を引き取る直前でも『父よ、私の霊を御手に委ねます』と自分の最後を父なる神に捧げたのである⁽¹¹⁶⁾。このキリストこそ、全生涯の教行信証を通じて終生誠実に神の御旨を行い、万代万人に代わって、父なる神と直接に繋がっていた彼の命を犠牲にするまで神の計画を遂行し、人間の叛逆と不従順、つまり多種多様な神格化罪を償贖し、悔い改めて愛神愛人の道に戻る人々のためのみに罪の赦し、神との和解及び神福参加を勝ち取ったのである。キリストは最後の晩餐の席で『友人のために命を与える以上の大きな愛はない』と言ったように、神が御自分の独り子を与え、犠牲にするほど人類を愛し、キリストも自分の命を人類の罪悪とその罪科の償贖として与えることによって最高無比の慈愛を示した。しかし、キリストの救いは個人の自由意思に反するものでなければ、強制的な救いでもない。神の恵愛、神の慈悲による罪行の赦し、キリストの無我的友愛によって成し遂げられた贖罪、神との和解および自分の死後永福の認否、受け入れ又は拒絶は人間一人一人に天然賦与されている自主的な決断とその実生活に委任されているのである⁽¹¹⁷⁾。唯一の神もキリストも正伝のキリスト教も愛神愛人の生き方とその自然で必然的な果報である神福の永遠参加を個人に押し付ける事がなければ、人に自分の救いを義務づけることもなく、脅迫する事も一切ない。ただし、拒神拒愛の道を自選して生きる者達は当然神旨、親愛とその不偏正義の露顕である永遠普遍で不偏の業報法に準じて来生の永福を得られないだけでなく、生前罪悪の大小と軽重に遵応する禍報しか得られないと明示するだけである。よって、犯罪を認めないで「善行」と思っても結構です。弱者の搾取によって得た財宝と我儘を「幸福」と勘違いしても結構です。無防備で無実な自分の子ども達を殺（墮）しても、「戦争の行為」という詭弁の傘下で敵の子ども達を最新兵器で無差別に殺傷しても結構です。唯一の神を拒否して冒瀆し、戦犯者や芸能人を崇拜しても結構です。救われなくても結構です。ただ、自分が自ら決行した行動の結果を覚悟せよということである。

キリストの復活。 神の無限恵愛に由来する人類救済の計画とキリストの贖罪的人死はキリストの葬儀で閉幕したのではない。お墓はイエズス・キリストの人死の終着駅であったならば、彼がいくら神秀秀英であったとしても人類が生んだ釈尊、老子、孔子、ソクラテス、アリストテレス、アウグスティヌス、空海、親鸞、道元、ラーマーヌジア、トマス・アクィナス、マザー・テレサやヨハネ・パウロ二世の如き最高悟智とその教行信証の偉人達の一人に過ぎなかったのである。もしキリストの人生も「死」をもって完成したならば、彼が示した無我的な愛神愛人の道が只の最高一流中の最優の哲学と理想の人道である。そして、彼が唱道していた神の恵愛、赦罪、贖罪、死後の正義と禍福、自己人死に対する自己責任等の福音はまさか彼の妄想であり、根も葉もない虚構であり、誠心誠意の人々に対する嘲諷である。結果としてキリスト自身も又、人類の歴史の中で最低最悪の

偽善者であり、精巧かつ陰湿な詭弁者や恐ろしい自己暗示又は精神錯乱の犠牲者であると考えざるを得ない。更に、もしキリストの生命が「死」で燃え尽きたのであれば彼の信奉者が人類の中で一番憐れで愚かな者達であり、一方、万代万人の拒神拒愛主義、無神論主義、私利私欲主義と自己本位主義に徹した者達は最高の叡智者であり、この上もない真福を掴んだ者達であると言える。しかし、人類、特に善意で全身全霊を尽して生き、永福を追求する人々の悲劇がここで終わるのではない。もし我々の生命が死の時に全面的で100%に尽滅し絶無に転じ、つまり来生が全くなければ、釈迦牟尼仏の教行信証を土台とする敬仏慈人、その正邪迷悟、身心脱落、終生誠実な身心学道とその自然で必然的な果報である輪廻転生や輪廻の超脱には何の意味があるだろうか。人が死んだ後で来生と生前善悪の報いがないのであればあらゆる人々の誠心誠意、全霊全身で親善慈愛や仁義礼知の生き方が畢竟、無意味に尽きる。生憎に釈尊、孔子、ソクラテス、アリストテレス、空海、親鸞、道元、ラーマヌジヤ、トマス・アクィナス、マザー・テレサやヨハネ・パウロ二世の如き者と彼らに跟着て来た万代万民の人々が皆寓者であり、神仏に頼らず強く明るく「人間」らしく生きることが出来なかったことになる。そして、愛神愛人を初め諸真宗教の正道を拒んで自己本位、勝手気ままと私利名声を追求して来た万民のごく僅かの者達は最高に正しくて「人間らしく」生き、人生を全うしたことになる。唯一で恵愛の神や慈悲深い唯一仏と死後の来生を本音で否定して生きる者達は死ぬ瞬間に全滅した父母のお墓の前に手を合わせて何をしているのか。存在的な「ゼロ」になった父母に息子や娘の結婚を報告する姿勢は一流の大学で教鞭をとっている拒神拒仏主義者や絶無論者の智慧であり、彼らが教育したインテリの誇るべき行動であろうか。変質者の手で殺されたり又重病で死に、単なる物質の要素に変成された最愛の子どもの「冥福」(とは何?)を祈り、法要や神事等に高額を費やす拒神拒仏主義者や絶無主義者の本音と心境とは如何なるものであろうか。その無意味な儀式の効力とは?まさか、軽蔑と無視される僧侶や神職に頼んで実在しない神仏に、死によって尽滅した最愛の者の空前絶後の冥福を祈願し、それをお金で手に入れる事が出来ると思うのではないだろう。一切の創造主、その全智と慈愛、人死の来生とその公平不偏の正義がないのであれば、宇宙万物の価値とその実存の意味もないし、万代万人も空前絶後の希望をもって生きる最も憐れな存在ではないだろうか。さらに、それを認識して絶望的で絶無的な終末に向かって浄く明るく誠を持って生きるのは余りに皮肉的で残酷な運命ではないだろうか。それとも、この素晴らしい宇宙万物と人間の存在、善美德と皆が憧れている「永遠の愛」は不可解、支離滅裂、無理知的や狂暴的で気紛れの不可抗力の酔いのいたずら又は、生きとし生けるものの病死苦難と絶望の生を嗜む悪神の遊戯であろうか。しかし、拒神拒仏主義、絶無主義、正邪・善悪と禍福の相対主義等の如きを神格化し崇拜する無責任者ではなく、小生もイエズス・キリストに信頼をおき、彼に弱い全身全霊を委ね、彼が教行証する愛神愛人の生き方に感無量の魅力を覚える。

イエズス・キリストの教えと同様に彼の復活も真で歴史的な事実である。キリストは復活したということを裏づける極めて信憑性の高い弟子達の証言が沢山あるが、ここは先ずキリストの弟子達が語る以外の証拠を採り挙げて、この不可思議で素晴らしい出来事を簡単に説明する。

第一、再生や人魂の現世的人体と再合一とも全く関係のない「復活」、つまり復活したキリストの人体は有した徳力性能の獲得が宇宙万物の理法、その存在の道理と人間の靈知に反しないからキ

リスト教の正伝もこうした「復活」を是認する。

第二. キリストの時代では、特にユダヤ社会において女性の証言の信憑性がゼロに等しく、信用の価値が極めて低かった。キリストの弟子達もそれを認識していたにも拘らず、復活したキリストに最初に逢って、それを伝えたのは数人の女性であったという事実を削除せずにそのまま記録に残した。後に弟子達他の人々も復活したキリストと再会するが、女性達の証言記録の保持はキリストの復活の確認および弟子達と初代教会の100%の確信の揺るがない証拠であると考えるのは常識である。

第三. キリストが復活した後に彼の墓を見張っていた『数人の番兵が(エルサレム)町に行き、起こったことをすべて祭司長たちに告げた。祭司長たちは長老と集まって協議し、兵卒たちに多くのお金を与えて言い含めた、「あの男の弟子たちが夜中に来て、我々の眠っている間に屍を盗んで行った」と言え。「これがもし総督(ピラト)の耳に入っても我々が宥めてお前たちに迷惑をかけぬ」と。言い含められた通りにしたのでこの話はユダヤ人の間に言い広められ、今日に至っている』。[マテオ, 28.11-15].⁽¹¹⁸⁾

使徒教会と初代教会は、キリストが復活したという事実を自分の目で確認し確信していたと同時に、それを揺るがそうとした敵の陰謀を恐れずにその敵の根回しの描写を含めて記録に残している。先ほどに引用した箇所を注意深くよむと、武器を持っていた数人の番兵が勤務中で皆が同時に熟睡したにも拘らず、弟子達がキリストの死体を運び出したという事をどうして言えるのか、そして熟睡した者達の睡眠中に起こった事についての証言はどんな価値があるのだろうか。更に、本当に弟子達が師の屍を運び出したならば、彼ら又は初代教会の指導者達はどうして『この話はユダヤ人の間に言い広められ、今日に至っている』という自分達の信仰にとって極めて危険で不利な文を削除せずに残したのであろうか。ここに出せる結論はただ一つ。誰が何を言おうとも何を考えようとも弟子達を初め、多くの信奉者は復活したキリストに確実に再会したとしか考えられない。

第四. 生まれつきからローマの市民権を持ち、ユダヤ教とギリシア哲学に通徹していたパウロという男はキリストとその教会を憎み、痛烈に迫害し、殺害されていた多くのクリスチャン、例えば聖ステファノの死を嗜み、それに賛同していた。しかし、突然改心してキリストの福音をローマ市まで広げただけではなく、学問的に解釈し、最後にローマ皇帝の裁判所でキリストの贖罪的な救済とその復活の真理を辨証するが、彼も死刑に処せられてローマで殉教したのである。彼自身もキリストが復活と昇天の後で彼に現れたという証言を残している。

第五. 聖書全体、特に新約聖書は現代の推理小説、マンガ、童話、暴露本、有名人の日記、政治家の提言、ノンフィクション小説、フリーメーソン諸結社の秘儀録、新時代運動系の臨死体験談、交霊会や霊媒会時の啓示録、歴代の帝王達又は將軍達の大行録と全く異なる「心」をもって記されたものである。聖書を著した者達は世間体、金儲けや歴史の評価ではなく、残酷な迫害逆境と敵視された立場の中でもキリストの教行信証を誠実に伝える事が唯一の目的と動機であったことは忘れてならない。

今度はキリストの復活を裏づける弟子達の証言⁽¹¹⁹⁾を初め、最初キリスト教を暴憎し、後にキリ

ストとその福音の為に全身全霊を尽し、自命も惜しまずに捧げた使徒パウロの証言を紹介する。復活したキリストに直接逢い、それを認め疑わなかった人々の証言と初代キリスト教の確信を聖パウロはこうまとめた。

『キリストは私たちの罪のために死に、葬られ、聖書に従って三日目に甦り、ケファ（ペテロ）に現れ、また十二人に現れ、その後五百人以上の兄弟（男女の信奉者）に同時に出現された。その中には死んだ者もあるが、ほとんどは今なお生きている。次にヤコボに現れ、それからすべての使徒に、最後には月足らずのような私にも出現された』[1コリント人, 15.3-8].

使徒マテオは自分が書いた福音書の中で復活したキリストが最初にマグダラの MARIA、もう一人の MARIA と他の婦人達、後に十一人の弟子達にガリラヤで現れたと証言する [マテオ, 全28章].

使徒マルコは自分が書いた福音書の中で復活したキリストが最初にマグダラの MARIA、ヤコブの母 MARIA とサロメ、次にエマウス町に行く途中の二人の弟子達と最後に昇天の前に十一人の弟子達に現れたと証言する。[マルコ, 全16章].

使徒行録も書いたルカは更に自分が書いた福音書の中で復活したキリストが先ず墓の側にマグダラの MARIA、ヨハンナ（サロメ）とヤコブの母 MARIA、次にペテロ、次にエマウス町に行く途中の二人の弟子達、次に沢山の弟子達と最後に昇天の前に十一人の弟子達に現れたと証言する [ルカ, 全24章. 使徒行録, 1.1-12].

黙示録と二翰の手紙も書いた弟子ヨハネは更に自分が書いた福音書の中で復活したキリストが先ずマグダラの MARIA、次にトマスを初め沢山の弟子達、次にガリラヤ湖の辺にペテロを初め六人の弟子達と最後に昇天の前に愛弟子ヨハネを初め十一人に現れたと証言する [ヨハネ, 20.11-21.23].

この章の結語として復活に関する現代人の対論に見事に答える使徒パウロの「復活観」の心髓を彼自身の言葉をもって紹介する。

『兄弟〔と姉妹〕たちよ、…私が第一あなたたちに伝えたことは、…聖書に記されている通り、キリストは私たちの罪のために死に、葬られ、聖書に従って三日目に甦り、ケファ（ペテロ）に現われ、…最後には月足らずのような私にも出現された。…死者の復活がないならキリストも復活しなかった。キリストが復活しなかったなら私たちの宣教はむなしく、あなた達の信仰もむなしく、その上私たちは神の偽証人となるわけである。…従ってキリストにおいて死んだ人々も滅びる〔つまりゼロに転ずる又は単なる物質に変成する〕であろう。私たちがキリストに希望をかけたのが世のためだけであるなら、私たちは人々の中で最も哀れな者である。しかしそうではない。キリストは死者の中から復活し、その初穂となられた。…全ての人はキリストによって生き返る。しかしそこには秩序があり、先ず初穂であるキリスト、次に来臨〔即ち最後の公審判〕の時キリストの者である人々が続く。そして終わりが来る。その時キリストは全ての権勢、能力、権力を倒し、父なる神に国〔つまり全世界〕を渡される。…死者が復活しないなら、「さあ、飲み食いしよう。明日は死ぬのだから」。しかし、思い誤るな。…酔いから覚めて正気になり、もう罪を犯すな。…ある者は尋ねるであろう。死者はどうして甦るのか、どんな体をもってくるのかと。…全ての肉が同じ肉ではない。人間の肉があり、獣の肉

があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。同様に天上の体と地上の体がある。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは違う。…死者の復活もそうである。…卑しいものとして蒔かれ、栄光あるものに甦り、弱いものとして蒔かれ、強いものに甦り、動物的な体として蒔かれ、霊の体に甦る。動物的な体があるように霊の体もある。…最後の〔公審判の〕らっぱが鳴り渡る時、またたく間にたちまち変化するのであろう。ラっぱはなり、死者は朽ちいぬ者に甦り、私たちは変化する。この朽ちるもの〔即ち肉体〕が朽ちぬ〔つまり不死不滅で超現象界的な徳力という〕ものを着、この死ぬ者が不滅〔の生命力〕をまとわなければならぬ。…それでは、愛する兄弟〔と姉妹〕たちよ、あなたたちの〔人甕の〕苦勞が主（キリスト）において空しくならぬ事をわきまえ、確固として揺るぐことなく、常に主の業に励みつとめよ』〔1コリント人、15章全体〕⁽¹²⁰⁾。

8. 唯一神と人間の栄光

スコラ学派だけではなく、正伝キリスト教は神の永遠栄光と人間が愛善の生き方によって得られる永遠の栄光とを識別する。神の栄光とは神聖にして善智美德の極まりない三位一体的な神の活動の輝き、その創造と維持の証明である宇宙諸相の素晴らしさである。人間の認否と関係なく、観測出来るか出来ないかと関係なく、美しく輝く無数銀河の世界、超顕微鏡でも把えられない極微生物や極塵、精妙な精神と諸霊の世界、一切の想像を絶する万有千化の多様性やそれらを通総し統制する諸理法が神の本然徳力とその性能の力量を示現するものである。その中で人間の出現、人間に賦与された徳力とその性能、特に自由意思、生殖力、唯一的個性と自主的な生き方（「自業」）による来生の禍福（「自得」）が唯一神の永遠栄光の一光一閃である。そして人間界の中で神の栄光は万代万民の智慧、特にイエズス・キリストの生き方とその諸活動に因って現れている。ここに言うキリストの栄光とは、彼の御独り子として、一人の人間としての教行信証の卓越と効力の輝きである。その中で特に無我で慈愛に溢れた奇跡、利他的で贖罪的な死、復活、昇天、教会の中での特別な現存とクリスチャンの博愛的活動はキリストの現世的な栄光を現わすものである。さらに、現世界とその万物の禍福的な自己完成を意味する「世の終わり」、「最後の公審判」と「新天地の創造」も勿論先ず神とキリスト、後は天使界、人間界と全自然界の栄光の公現となるであろう。

人間の真なる栄光とは如何なるものか？ 現代の情報機関のほとんどは諸国家、特に米国の核兵器と経済力の威嚇を拠所とする先進国の軍事力を初め、多国籍企業と諸国の大手企業の経営陣の自己本位的な富饒、権威、実力、娯楽と名声の放蕩を人類の誇るべき進歩とその栄光とし、人間存在とその究極目的と見なし、永福達成への正道として自慢気に賞讃するのである。しかし、一見にこの魅力的な富裕と永福を思う存分楽しむ人類の「少数楽園」の郊外に全く異なる別世界、地上の地獄がある。弱者と労働者の陰湿的な搾取、無防備な子どもたちと老人の餓死、宿のない若者、治療が全く受けられない貧困者、信教の自由を奪われている人々、生き延びるために非道と凶悪を虐げられる者、政治的権力の闘争で生活の基盤を失った難民、差別主義的な司法と政権によって裂かれた家族、ナパーム等の化学兵器や核兵器使用の後遺症に苦しむ無防備な人々は娯楽と放埒に耽てい

る政経医と芸能の名人豪邸の裏現状である。世界のカメラの前で元気いっばいの愛犬を抱きしめてにこにこしながらキャンプ・デヴィットの庭を歩いた大統領夫人は斃れそうな母親に弱く抱かれて死んでゆくアフガニスタン、イラクやアフリカの子もたちとその母親たちの涙もでない眼差しを思い浮かべたのであろうか。「平和主義者」と呼ばれる首相と代議員達は太平洋戦争の戦犯者を「神々」として、国家の「英霊」として拝んだ時に神仏、平和それとも失敗で終わったアジア覇権の精神に敬意の誠を捧げたのであろうか。世界各国の極貧、飢餓、無知、暴力、差別、或る種の迫害、革命流血や憎悪合戦という兇悪は、国家や民族優越主義系のマス・メディアが仄めかすように、貧乏人、飢えている人々、教育のない者達、暴力団、苛められている人々、革命家や真宗教を本源とする結果ではない。又それらの困窮と悪はアフリカ人、中南米人、中東や東南アジア等民族の羞恥ではない。それら諸困窮の直接な原因は十数世紀に及ぶ各国の指導部、特に産業革命を発端としたイギリス、フランス、米国、日本、ドイツ、ソ連と中国及びそれらの政経理念を各方面から支援する諸種の億万長者と実力者の無尽私欲、自己本位を規準とする政経的な覇権欲、栄利の永続欲と何より隣人の人権軽視と慈愛を拒む姿勢にある。それらの超大国の政経政策の真目的が全人類、特に恵まれていない人々の平和、平等、人権保護、生活状況の改善や精神的向上ではなく、「人類の進歩と民主主義の普及」という名目の下で米国を軸とした先進国富饒階級の栄利永続とその価値観の絶対化、つまり彼らの優遇と所有の神格化である。しかし人類の歴史は証明するように、そのような栄利が発展途上国等の貧国の資源、労働力および消費者の搾取的利用なしに成り立たない。そして米国の栄利を「絶対不可侵的な聖域」とし、先進国の政策を「正見」と見なし、彼らの利益追求を「正道」とし、それに合致した行動と努力を「善道」と称せられる一方、その利益を脅かす政策を「邪見」と断定し、彼らの利潤追求を阻む行動を「悪道」、「テロ」や「世界民主主義に反する独裁」として見なすのである⁽¹²¹⁾。いずれにせよ、困窮に瀕する人々、特に英米と先進国栄利と無縁の困窮、例えばスーダン難民は相変わらず無視されるのである。ただ、超大国の損益政策に変化が生じた場合、例えばアフガニスタンやイラクの場合は或る時に味方、次の時に一転して敵として扱われ、奴隷のように虐げられる状況にある。

この世の実力者達は自分たちが有する富、権力、権威、名誉、人気、賞讃と娯楽が永遠に続く永福の基盤であると勘違いしている。何故かと言うと、彼らの現世的な栄光が彼らと全く同等の人間である政経的又は心身的な弱者の軽蔑、困窮と死苦の上に建設されている。さらに、彼らの富饒と栄利は永遠でなければ真福でもなく、暗夜の虚栄であり、死の瞬間に彼らの手を永遠に離れるとキリスト、釈尊、老子、莊子、孔子、アウグスティヌス、空海、道元、親鸞、ラーマーヌジャ、トマス・アクィナス、マザー・テレサや教皇ヨハネ・パウロ二世(本名, Karol Wojtyła)を初め、人類の諸聖哲が勢揃いで明らかに教示するのである。現代世界の金持ちと政経の実力者のほとんどは立て前の弁詰を別として、事実上で自分たちとその所有物や私有権を**神格化し絶対不可侵的な価値**とするのである。しかし、人間誰もが帝王の息子であろうとキンシャサ市のスラムに住む売春婦の娘であろうと、世界最強の医師団と黄金の衣で身を飾った最愛の家族に囲まれて死ぬ石油の大王であろうと排泄物の泥路で死んだ人であろうと、アリストテレスであろうとニーチェであろうと皆は裸で生まれ、

そして死ぬ時に自ら成し遂げた愛神愛人の言行又は拒神拒愛の言行の果報以外にあの世へ一銭一品も持って行かないのである。キリストとその誠実な諸聖哲の教示によると、唯一神とキリストの永遠栄福を離れて、人間の真福真栄がない。そして唯一の神しか知らない現世界の終末とその完成の時に新天地が創造され、万代万人の最後公審判を遂行するためにキリストが再臨し、愛神愛人の道理を規準に我々一人一人の永遠禍福が確定されるのである。イエズス・キリストはこの宇宙的な大出来事の風景をこう描いた。

『人の子〔つまりキリスト〕は〔宇宙の終わりに〕その栄光のうちに多くの天使を引き連れて光栄の〔最高公審判者の〕座につく。そして諸国の人々を前に集め、…右にいる人々に向かい、「父に祝せられた者よ、来て、世の初めからあなた達に備えられていた国を受けよ。あなた達は私が飢えていた時に食べさせ、渇いている時に飲ませ、旅の時に宿らせ、裸だった時に服をくれ、病気だった時に見舞い、牢にいた時に訪れてくれた」と言う。すると義人たちは答えて、「主よ、いつ私たちはあなたの飢えている時に食べさせ、渇いている時に飲ませ、旅の時に宿らせ、裸の時に服をあげ、病気の時や牢に入られた時に見舞ったのでしょうか」と言う。王〔たるキリスト〕は答える、「誠に私は言う。あなたたちが私の兄妹であるこれらの小さな人々の一人にした事は、つまり私にしてくれた事である」。又王は左にいる人々に向かって言う、「呪われた者よ、私を離れて悪魔とその遣い達のために備えられた永遠の火〔つまり地獄〕に入れ。あなたたちは私〔つまりキリスト〕が飢えていた時に食べさせず、渇いている時に飲ませず、旅にあった時に宿らせず、裸だったのに服をくれず、病気の時や牢にいた時に見舞いに来なかった」。その時彼らは言う、「主よ、あなたが飢え、渇き、旅に出、裸であり、病気になり、牢に入られた時、いつ私たちが助けませんでしたか」。王は言う。…「誠に私は言う。…これらの小さな人々の一人にしなかった事は、つまり私にしてくれなかった事だ」。そして、これらの人々は永遠の刑罰を受け、義人は永遠の生命〔の至福〕に入るであろう。〔マテオ、25₃₁₋₄₆〕⁽¹²²⁾。

要するに、先ず全身全霊を尽して唯一神とキリストを愛し、そして人々、特に困っている者を自分の如く愛した者達の永遠慶福とその新境遇の輝き、一方、愛神愛人の道に悖る生き方をした者達の永遠禍苦と新境遇の悲惨さ、つまり神の恵愛と正義の秩序、人の永福のために全人衆を捧げたキリストの博愛、一人一人の人衆成果が宇宙的な永遠栄光の頂点であろう。

結語にかえて ～「愛神愛人」と人間の永遠禍福

聖トマス・アクィナスよりもキリスト教の人間観を正確に論篤した者はいない。彼によると、人間は永遠に無限で神聖と神秘の極まりない徳力を本然性質とする三位一体的な神にかたどられて創造された者である。他の万我と同様に人間も神の完全自由で無償の恵愛の故に創造され、神のはからいによって永遠の存続とその禍福的な性向を本有する人格的で個性的な靈魂と身体の一部として存在し、活動しながら自らの決行によって自分の来生禍福を造り上げている。ある者は神の無辺際智と恵愛によって設定された秩序と詔を守って生きるが、ある者は唯一神を否認したり自分や他の

被造物を「神」と見なしたり、自分の知識と私利私欲を最優先して生きるのである。しかし、この自他神格的な悪趣は神によって一人一人の人間性の根幹として賦与された自己認識、知能と自由決行の能力を全面的に停止することがなければ100%に麻痺させることもない。神は人間に無限永福の参加を人笈の究極でこの上もない素晴らしい目的として与えたのである。ただしその目的達成も強制されているのではなく、各人の人間性に賦与されている自主的な決断、正善的で自主的行為によって獲得できる永遠存在の境遇である。よって、迷悟、正邪と善悪の趨向を本有する人間を助けるために神は数多い聖哲を通じて万代万民を導いてきたが、二千年頃前に自分の御独り子をイエズス・キリスト、つまり救い主イエズスとしてこの世に遣わしたのである。彼は全生涯の教行信証を通じて神の御旨を自分の旨とし、神の無上恵愛を示すため、そして神を超える自己神格化を試行する人類を神と和解させるために万代万人に代わって自らの人間的な命を罪悪の贖いと罪科の償いとして捧げたのである。三位一体的神の第二の神格者でありながら皮肉骨髄の人間でもあるキリストは十字架上の死、死者からの復活と昇天に因って、「愛神愛人」の道を歩む人々に永遠慶福、つまり天国への門を開き、その現実を証明したのである。

万代万人は神の被造物であり、神の肖像である以上、平等な人間である。そしてどんな人であろうとも神の恵愛とその救済的な働きの外でなければ、唯一絶対者である神の正義外に一瞬一寸も永遠に出る事が出来ない。神力が及ばない時場と存在がないと言えども、神法、万有の理法と人倫の正道に順従する生き方は強制されているという意味ではない。一切の究極的創造主であって存養主であり、君臨主であって救済主である神は迷悟、正邪、善悪、利害や愛憎等の識別力、認否力、自由決行力を人間性の根本徳力として人間に賦与された以上、それを現世実力者のように勝手気ままに取り下げたり中止したりする事はしない。しかし、人間が唯一絶対神を超越しなければこの世においても人間の自己本位や私利私欲が絶対法でもない。更に、人間の自由決行も支離滅裂や勝手気ままの結果と果報を生ずるのではなく、神の御旨の活現成である普遍の因果法と不偏の業報法に自然で必然的に遵依し、必ず自己責任を伴う生き方しか出来ない。因って、自由意思をもって全身全霊を尽くして愛神愛人の道を歩もうとする義人と、唯一神を否認したり誹謗したり、他人を搾取したり困窮に瀕する者を無視したりする悪徳者の行為とその人笈の真価値が世間の評価の如何にも拘らず永遠に異なるしその果報も当然永遠に違って来るのである。かくして、キリストの弟子達、アッシジの聖フランチェスコ、聖トマス・アキナスや聖マクシミリアン・コルベの如き者達と、あらゆる植民地や貧民を政経的に搾取していた諸大国の権力者と悪徳商人、神仏の名によって人々を圧制する悪徳宗教者、万代万民の戦犯者、無防備な人々を殺害する者達、社会的弱者他を搾取し自らの財宝を増大する者達の人笈の成果、その生き方の評価および死後の報いとその栄光が本当に同等であれば、それは正しく理解された神の恵愛と正義、又は仏命の慈悲と業報法に本当に適うであろうか。

唯一神の御独り子であるイエズス・キリストは勿論のこと、釈迦牟尼仏も、そして彼らの教行信証に魅了され、全身全霊を尽くして愛神愛人や敬仏慈人の道を歩んで来た万民の有名又は無名の義人、更にアッラー、梵、天や道の如き教行信証に誠意と慈愛を持って従い、他人を自分のように慈

しんでいた万代万民の聖哲とその誠実な信奉者は皆揃って、「人々は唯一神、アッラー、梵、仏、天や道と称せられる絶対的な御命を造ったのではなく、この御命こそ人類等の万世千界の本末の親である」と確信して教示している。それと同時に彼らは「人堯の究極目的、つまり人間存在の意味は、一人一人が天賦されて本有する人間性の禍福的な開き（性向）とその実現力を自主的な決行、つまり生き方を通じて発展させ、自分の永福又は永禍を獲得する」と唱道してきたのである。

〈完〉

註

- (106) 『神学大全』, *ibid.*, vol.6. pp.23-27, 282-283, 347-403.
- (107) 『聖書』(新約篇), *ibid.*, pp.116 (ルカ, 16. 19-31). 更に, デンシンガー・シェーンメッツァー, *ibid.*, pp.724-725 (地獄の存在, 本性とその境遇を得る者達についての教理の内容とその沿革, 特に338, 342, 409-411, 443, 485, 574-575, 596, 780, 839, 858, 929, 1002, 1075, 1306条). “Catechism of the Catholic Church”, *ibid.*, pp.269-271 (1033条から1037条まで). 『カトリック教会のカテキズム』 *ibid.*, pp.310-312 (1033条から1037条まで) を参照.
- (108) デンシンガー・シェーンメッツァー, *ibid.*, pp.672-675 (人間の罪とその果報), 683-687 (神の恩寵について), 722-725 (道徳生活と神, 特に人の死, 私的審判, 至福直観, 地獄, 煉獄, 世界完成について). デュフール X.L., *ibid.*, pp.1-7 (愛), 15-16 (悪人), 80-84 (命), 107-112 (栄光), 175-180 (神の国), 239-245 (義), 294-300 (悔い改め), 371-373 (幸福), 374-376 (悪魔), 384-391 (死), 406-410 (自由), 460-468 (信仰), 600-601 (罪の償い), 603-612 (罪悪), 619-622 (天国), 693-695 (罰), 722-725 (至福, 天国, 煉獄, 地獄, 死者復活, 公審判), 794-798 (報い), 868-870 (良心). 沢田和夫, *ibid.*, pp.84-94.
- (109) 『聖書』(新約篇), *ibid.*, pp.164, 74, 108, 110, 25, 43 (特にヨハネ, 16.1-4, マルコ, 13.9-13, マテオ, 24.9-14, 25.31-46, ルカ, 12.4-6, 13.3 を参照.)
- (110) *ibid.*, pp.139 (ヨハネ, 3.15-18), (ガラツィア人, 4.4)
- (111) デンシンガー・シェーンメッツァー, *ibid.*, pp.675-678 (キリストの神性, キリストの人間性, キリストの靈魂, キリストの身体, 神性と人間性の関係, 位格的単一性). デュフール・X.L., *ibid.*, pp.159-226, 286-292, 418-422, 681-691. 『公会議公文書全集』, 南山大学監修, 中央出版社, 1976 (’69), pp.5, 45, 77-87, 99-101, 115, 123, 155-159, 165-167, 175-179, 203-217, 221-227, 235, 309, 361-363, 375, 425-437, 447, 463, 467, 565, 619-623, 735. 沢田和夫, *ibid.*, pp.135-137.
- (112) 万代万人の宗教的指導者, 現代の多くのカトリックや他のキリスト教系の諸指導者(枢機卿たち, 司教たち, 主教たち, 神父たち, 牧師たち他)の偽善と悪徳を露にし, それらを咎めるキリストの言葉がマテオ福音書(23.13-36)とルカ福音書(11.39-52)の中で読み取れる. 『聖書』(新約篇), *ibid.*, pp.10-11, 38, 43, 112-113. 上記の聖職者はその言葉を頻繁に読んでいるが, 未だ自分たちの言行が指摘されている事に, 多くの者は気づいていないようである.
- (113) キリストのこの話しは現代の国際社会の秩序を裁く「御言葉」であると思う. アメリカ合衆国を指導者とする世界先進国, 特に日本, イギリス, フランス, サウディ・アラビア, クウェイト, スウェーデン, スイス, カナダ, オーストラリア, イタリア, スペイン他が過去と現在において世界中のいわゆる発展途上国, 特にアフリカ, 中東, 東南アジアに対して行ってきた陰湿的, 偽善的で国家ぐるみの覇権政策, 経済的な搾取とテロ, 軍事的な脅迫を人間の自由, 平等と民主主義と呼び, その秩序を美化し, 今でも増強しようとする. 神も仏も, アッラーも天命もという絶対者をも認めない又は軽蔑する者はもとより万民平等, 公正誠意, 慈悲や隣人愛も事実上で認めないから致し方ないが, カトリック教会, 東方正教やプロテスタント系の諸宗派を初め, イスラム教, 仏教, ヒンズー教や儒教の指導者と信徒の多くはその屈辱的な現実を黙認するだけではなく, 積極的に応援する. もし釈迦牟尼仏がこの世で再登場したら仏教徒によって非国民として少なくとも再教育の重労働の終身刑を受けるに違いない. キリストもキリスト教の指導部によって「混乱の扇動者」や「共産主義者」として破門されるだけで済めば幸いだと思う. 日本だけの過去の現実を明かす僅かな参考書として, 西山俊彦, 『カトリック教会の戦争責任』, サンパウロ書店, 2000, ビクトリア・B., 『禅と戦争』, 公人社, 2000, 部落差別と宗教研究会編, 『人間と差別と宗教』, 中外日報社, 1985, 上杉聡, 『天皇制と部落差別』, 三一新書, 1996 (’90), 宮下正昭, 『聖堂の日の丸』(奄美諸島のカトリック迫害と天皇制及びカトリック信徒内の悪質な苛め), 南方新社, 1999を参照.
- (114) 『聖書』(新約篇), *ibid.*, pp.161-167, 129, 247, 268-269.
- (115) *ibid.*, pp.49, 79, 129, (マテオ, 27.45-56, マルコ, 15.33-49, ルカ, 23.33-49)
- (116) *ibid.*, pp.45-49, 76-79, 127-129 (特にマテオ, 26.36-46, 27.45-56, マルコ, 15.28-41, ルカ, 22.41-45, 23.46).
- (117) 沢田和夫, *ibid.*, pp.157-161. ネメシエギ・P., 『キリスト教入門』, 南窓社, 1980, pp.70-153. デンシンガー・シェーンメッツァー *ibid.*, pp.679-681. デュフール・X.L. *ibid.*, pp.286-292. フォーサイス・P.T., 『十字架の決定性』, ヨルダン社, 1989, pp.7-133.
- (118) 『聖書』(新約篇) *ibid.*, p.50.
- (119) *ibid.*, pp.50, 80, 130-131, 172-177. “Catechism of the Catholic Church”, *ibid.*, pp.166-171 (639-658条). 『カトリック教会のカテ

キズム], *ibid.*, pp.192-198 (639-658条).

(120) 『聖書』(新約篇), *ibid.*, pp.27-272.

(121) この私観はテロリズム, つまり自己中心的な利益を得るための暴力行使又はその脅迫の正当化を意味するのではない。よって, 日本赤軍が行なったテル・アヴィブ空港での無差別殺害, パレスチナ解放軍による旅客機の無差別ハイジャック, ニュー・ヨークの国際貿易センターの破壊行為やマドリッドでの電車爆発の行為が無差別テロとして兇悪の犯罪である。しかし, それらのテロ行為は世界民主主義, 全人類に対する挑戦, 普遍秩序の否定でなければ善道全体の蔑視ではない。特にニュー・ヨークの国際貿易センターの破壊行為をワシントンのペンタゴンの破壊行為と別々に扱ってはいけない。これらの行為は米国を最高指導者とする世界の搾取と覇道の連帯組織および先進国の政経的なテロとその美化に対する極端な反攻である。ビン・ラディンがソ連と戦った時に米国とイギリスの武器と日本の支援を受けて「自由と民主主義の英雄」として賞讃されたが, 米国とイギリスに銃を向けた時から「兇悪者」と「テロリスト」の名を付けられた。アフリカ各地で数百万の人々は戦火に巻き込まれて苦しんでいるが, 米国, イギリス, フランス, イタリア, オーストラリア, ポーランド, スペインや日本の国益に悪影響がなく, 石油もないから, 民主主義や人間平等のために軍事的介入の動きは全く見られない。世界の最高で最善の民主主義, 人間平等と人権尊重の国家として自讃する米国の大統領, イギリス首相と日本の総理は無防備なアフリカ人の惨殺が世界の民主主義, 人間平等と人権尊重に反するとは思っていないようである。その残酷な現状は日英米のマスコミによってほとんど取り上げられていない。その代わりにゴルフ, 野球やサッカー等のスポーツの選手達が国民の夢を実現し, 若者に希望を与えている女神達と男神達のように誉め称えられている(AD.2006年11月現在)。その代わりにイラクへの侵略はテレビゲームのように美化され, イラク捕虜に対する米軍の虐待も闇に葬られ, 米軍はベトナムで大量に使用したナバーム弾と枯れ葉剤の悲惨な副作用も国際社会の記憶から抹消され忘れられようとする。ところが, 英米が自分達の責任を棚上げしたままで他国の戦争犯罪と人権抑圧を厳しく追求している。万国, 万民と万人の本当の平等とは? 本当の国際的な秩序とは? 群衆主義ではなく本当の民主主義とは? 本当の正義の味方とは? 自己本位的な世論ではなく真の人倫とは? 本当のテロとは? 本当の先進国と超大国の政経的なテロリズムがないのか? 真の神仏を敬愛し相手を己のごとく愛し慈しむ事を終生誠実な心身学道とする真の宗教を公私の教育, 社会と政経の生活から排除したり蔑視したりする国家が国連の常任理事国又は国際秩序の指導国として本当に相応しいであろうか?

(122) 『聖書』(新約篇), *ibid.*, pp.43.

使用文献

キリスト教関係

BIBLIA SACRA <Vulgata>, 2 vls.	Deutsche Bibelgesellschaft		4 1985 [’69]
聖書<旧約・新約>	バルバロ, F. 訳	講談社	2 1981 [’80]
Catechism of the Catholic Church	Holy See	Lib. Ed. Vaticana	2 1997 [’94]
カトリック教会のカテキズム	日本カトリック司教協議会	カトリック中央協議会	2 2002 [同年]
(第二ヴァチカン) 公会議公文書全集〔別巻〕	南山大学監修	中央出版社	2 1976 [’69]
カトリック教会文書資料集	デンシンガー・シュンメッツ著	エンテルレ書店	1974
カトリック教会の教え	日本カトリック司教協議会監修	カトリック中央協議会	2003
The Apostolic Fathers	Lightfoot J.B. 等	Apollos	3 1990 [1891]
キリストの神秘<レオー一世著>	上智大神学部編	創文社	1965
神学大全 (トマス・アクィナス著), 10巻	高田三郎 (全訳責)	創文社	1960~1967
カトリック教会の道徳<アウクスティヌス著>	上智大神学部編	創文社	3 1978 [’63]
デカルト	野田又夫著	中央公論社	2 1986 [’78]
キリスト教入門	ネメシェギ P.	南窓社	1980
アウグスチヌスと第十三世紀の思想	高橋亘著	創文社	1980
トマス・アクィナス	山田昌著	中央公論社	2 1985 [’81]
友のためにささげたいのち	千葉茂樹著	女子パウロ会	6 1992 [’82]
生命の尊さを語る	マザー・テレサ著	中央出版社	2 1985 [’83]
パウロ・親鸞・イエス・禅	八木誠一著	法蔵館	2 1986 [’83]
聖書思想事典	デュフル・X.L.	三省堂	1983
創世記	米倉充著	人文書院	1984
空間・時間・復活	トランス・T.F.	ヨルダン社	1985
死の神秘	デュフル・X.L.	あかし書房	1986
神学大全入門	沢田和夫	あかし書房	1987
十字架の決定性	斎藤剛毅	ヨルダン社	1989
マザー・テレサ	和田町子著	清水書房	3 1996 [’94]
死と永遠の生命	大林浩著	ヨルダン社	1994
希望の扉を開く	ヨハネ・パウロ II 世著	同朋社出版	1996

パスカルの人間観	児玉正幸著	行路社	1992
アウグスティヌスの哲学	谷隆一郎著	創文社	1994
死と永遠の生命	大林浩著	ヨルダン社	1994
トマス・アクィナスの三位一体論研究	片山寛著	創文社	1995
聖堂の日の丸	宮下正昭著	南方新社	1999
カトリック教会の戦争責任	西山俊彦著	サンパウロ書店	2000
そ の 他			
儒教聖典	仏教伝道教会	廣濟堂	² 1984 [*81]
神道聖典	仏教伝道教会	廣濟堂	² 1983 [*83]
大死生観	加藤咄堂著	史籍出版	² 1982 [*08]
Aristotle	Ross D.	Methuen & Co.	⁶ 1977 [*23]
Patterns in Comparative Religion	Eliade M.	Sheed & Ward	² 1971 [*58]
Cosmos and History	Eliade M.	Harper T.	1959
Le Grandi Religioni, VI vls.	Rizzoli Editore.		1964
A History of Philosophy, V vls.	Copleston F.	Newman Press.	1966
仏教とキリスト教の比較研究	増谷文雄著	筑摩書房	²¹ 1985 [*68]
アルファ・大世界百科事典	日本メール・オーダー社		1971
立体哲学	渡辺義雄編	朝日出版社	⁹ 1976 [*73]
万有百科事典, vol.4 (哲学・宗教)	小学館編	小学館	1974
Storia delle Credenze e delle I. R.	Eliade M.	Sansoni Ed.	1979
世界の幸福論	山田孝雄編	大明堂	1979
神道の生死観	安蘇谷正彦著	べりかん社	1989
新宗教事典	井上順孝編	弘文堂	1990
天皇制と部落差別	上杉聡著	三一新書	² 1996 [*90]
臨死体験上下	立花隆	文藝春秋	1994
死ぬ瞬間と臨死体験	E. キュプラー・ロス著／鈴木晶訳	読売新聞社	³ 1998 [*97]

HUMAN ETERNAL DESTINY

~ Shakamuni's legacy of beholding the Buddha-nature in all things and loving compassion towards all human beings;
and Christ's legacy of love towards God and human beings ~

~ Parts 4 & 5 ~

THE CATHOLIC DOCTRINE OF HUMAN ETERNAL BEATITUDE OR PERDITION

☆

This paper is a new exposition and reinterpretation of Catholic anthropology advocated by *Saint Thomas Aquinas* (A.D. 1225-1274) and the most influential school of Christian philosophy and theology called '*Schola*'. I have paid a particular attention to the doctrines expounding the essential qualities of human nature, the existential and eternal destiny granted to all human beings by the all-transcending and eternally impenetrable God. I have presented them in order to compare them with the equivalent doctrines promoted by Zen Buddhism, and especially by Japanese school of Soto-zen and its *Patriarch Dogen Eihei* (A.D. 1200-1253). The school of Schola, and especially St. Thomas, clearly emphasizes the existential and eternally inseparable dependence of all human beings on the absolutely transcendent God. At the same time, he points out towards the existential disposition (destiny, potentialities) of human nature, aimed 'per se' at the eternal yet bi-polar free goal of human existence, i.e. the eternal happiness rooted in eternal 'participation' in the glory of God, or the eternal 'doom of perdition', originating from eternal separation and exclusion of individual soul from participation in that glory. The Schola upholds that every human being is endowed with all virtues and potentialities opened towards realization of its bi-polar existential goal; namely a state of eternal happiness and bliss, or a state of eternal and conscious perdition. This personal human destiny of eternal happiness or doom is basically determined by the quality (right-wrong, good-bad, etc) of freely chosen and freely executed individual deeds i.e., the human free yet accountable rationality, the free yet responsible choice of the conscious will, the free yet effect-causing human activities aimed at obtaining freely chosen objectives of terrestrial life as well as the ultimate goal of human existence. In Christianity, as it is the case in other true and universal religions and philosophical systems, there is no anthropology without or outside of cosmology and theology (i.e. the science about the Ultimate and Supreme Being).

The growth of nationalism, the rise of political and economic Superpowers, relatively long period of external peace, maintained by the balance of accumulated nuclear weapons ('Pax Russo-Americana'), social and material welfare, fabulous results of outstanding scientific and technological achievements enjoyed by populations of advanced economies, extreme poverty, exploitation of underprivileged and labour force by capitalists of all categories and ranks (believers, atheists, etc.), and finally the exploitation of underdeveloped nations by the political and economic superpowers have caused the desolation of human hearts, sterilization of human spirituality, produced mutual distrust and hate, generated a steadfast faith in omnipotence of natural sciences and evoked in some societies and even nations the unwavering and unquestionable conviction in the "super-human" and "divine" nature of emperors, rulers, nations and races: the Japanese Tennoism, Nietzsche's theophobia and divinization of anti-theistic personalities, German Fascism, Communist or Maoist Infallibility, Absolute righteousness of the State, Human rights of the Wealthy and Powerful, Absolute inviolability of the USA's global, political and economic egoistic interests ...etc. All these causes have resulted in an illusive aura of human existential self-efficiency, total independence from the Supreme Being and disregard for Its cosmic laws and moral order. At the beginning of the 21 century humanity finds herself in the midst of deadly struggle for world supremacy, maniacal pursue of unsatiable greed for power, aberrant pleasures and materialistic wealth. All this is very often done in the name of undeniable human rights of freedom, welfare, self-determination, intellectual progress, happiness, mutual respect and love for the highest values of humankind. However, if we take a closer and deeper look beyond the beautiful masks of smiling yet sly presidents, emperors, kings, premiers, politicians; divine authority-thirsty yet 'tomb-like' prelates and bewitching statements of various charlatans and deceivers, we discover another, yet very scrupulously *hidden side* of human reality. To our disappointment we will find out that, the so called 'democratically' obtained power, 'legally' earned wealth, 'free and legitimate' pleasures, 'fully deserved' honours and 'national' glory grow from tens of millions of human miseries, poverty, sufferings, sacrifices, heavy labour and taxes, discrimination, bribes, fraternal struggles, suicides of workers fired out, slaughter of innocent, tragedies of divorced families, tears of unwanted and abused children, despair of unloved solitary people etc. *What are all these creatures living for ? ? ?* According to the 'sacred and unquestionable' laws promulgated by the 'deified' or quasi-divine rulers of affluent societies, aren't all those poor people the "human beings" endowed with equal rights to wealth, happiness, spiritual growth and human dignity ? Why the peace-loving UN doesn't bestow any "International Honours" to the physicians, nurses and victims of aggressive wars in Poland, Ukraine, Russia, Lithuania, Bielarus, France, Pacific islands....etc, to the innocent victims of atomic bombs of Nagasaki and Hiroshima, to the nameless victims of colonization and slavery, to bereaved children whose parents had been killed in the name of 'true democracy' by the USA-made napalm bombs dropped in Vietnam, Afganistan and Iraq, to the Chinese

parents who had taken under their roof the abandoned children of fleeing Japanese aggressors and raised them as their own, or to the victims of Pol Pot's genocide? Why there are no eulogies for the patience and sacrifices of people starving in countless slums of Africa, Central America, India, China and even USA – the leading 'advocate' of the human rights? The long history teaches us that the wealthy part of mankind, despite of its fascinating and glamorous rhetorics, is 'de facto', as it had always been throughout past centuries very unyielding and staunch in perpetuating of its privileged yet unjust 'status quo' in the name of the divine or highest human values. If this order and its laws are the ultimate '*dictum and eternal verdict*' for all humanity, then we have to not only acknowledge the mockery, irrationality, existential fatalism, absurdity and irony of the dedicated and benevolent human lives, but also the cold-blooded cruelty and invincible insanity of the Cosmic Nature. If the present world order is the only right one then Christ, Shakamuni, Lao Tse, K'ung Fu-tse, Nagarjuna, St. Paul, Augustinus, Cyrillus, Kukai, Thomas Aquinas, Shinran, Dogen, Ramanuja, Ryokan, Maximilian Kolbe, Russian, Ukrainian and Belarusian hieromartyrs, Mother Teresa and alike had been the worst of all villains, knaves and deceptors of humanity. *However*, taking into consideration the sheer fact that even the most malicious people *yearn for justice and crave for eternal happiness*, we have to admit the existence of universal, unchallengeable, unmanipulatable and impartial Power executing the order of justice for all; for the poor and wealthy; for the powerful and discriminated; for the good and malicious; for the deceiver and deceived; for the believers and unbelievers; for the believer of true religions and worshippers of idols, money, pleasures and war criminals; for the rich and influential Hindu, Buddhist, Christian, Muslim and other prelates; for the semi-diving heads of states and their puffed-up First ladies; for the power and money thirsty members of national parliaments; for the people of good and of evil will as well.

Not to convince the unconvinced lords of the 'terrestrial justice', always discriminating the weak and the poor, but to strengthen the humiliated and forsaken ones and to throw a new light on the questions of greatest vital importance for every human being, I have presented here the most significant views and teachings of Christian, particularly these of St. Thomas Aquinas and his school's anthropology and *reinterpreted* them, using the language and concepts of our times. I have paid a special attention to the following doctrines:

- (1) **Every human being is created in the image of God.** The Catholic tradition and her most prestigious Schola school teach that "God created the human beings in the image of himself male and female" out of His completely free will and gratuitous love. The Catholic anthropology upholds that men and women of all ages, races and nations are called into being by *God himself* as His 'human personal images' and that every human monogamous family is an 'analogical copy' of God's eternally impenetrable and sacrosanct '*Trinitarian Family*'. That is why the Catholic tradition has always regarded the monogamous family, united by the bonds of life-lasting love, to be the fundament and fulcrum of the human society. Saint Thomas emphasizes however, that this "image" or "copy" doesn't mean the 'identity, sameness or equality' of the Divine and human essential natures, but only *a remote analogy* in some of their existential virtues, i.e. a partial resemblance and certain similarities between the Divine and human existential virtues, powers, abilities, functions and activities.
- (2) **The eternity of the human soul, the original sin, the essence of all other human sins and wrongdoings.** God creating the first human pair, not only endowed them with the minimum of human essential qualities, but He bestowed upon them as well as upon all their descendents the gifts of happy and misery-free terrestrial life, 'immortality' and an easy and painless way to attain the celestial happiness of participation in his glory. However, the permanence of these '*supernatural*' virtues (i.e. the qualities exceeding the limits of the 'human nature') had been conditioned by the *human recognition and respect* of the most fundamental, absolute and 'per se' evident order of the cosmic and human reality, i.e. the absolute value, the undisputable righteousness, the unquestionable authority and the highest dignity of God's wisdom and goodness (namely the '*transcendent wisdom and absolute goodness*' of God, the Ultimate Parent and Creator of all beings). God gave Adam and Eve only one precept: "You may eat indeed of all the trees in the garden. Nevertheless of the tree of the knowledge of good and evil you are not to eat, for on the day you eat of it you shall most surely die!" [Gen.2.16-17]. Yet the first man and the first woman had freely chosen to follow the semi-advice of an unknown, feigned and spurious guardian of the 'human natural right' to know the good and evil in order to become equal with God. This attitude of human arrogance, self-exaltation and even superiority over God found its expression in *Nietzsche's* declaration of *theocide*, in deification and enthronement of selfish supermen; in the Japanese '*Tennoism*' and, to a certain degree in Maoism, in Communism, Fascism, in the cult of the State (especially in absolutization of the s.c. "reasons of the State"); in sanctification of the Capitalistic selfishness and forceful vindication of exploitative rights of the wealthy, powerful and privileged.
- (3) **Nature of the human soul and the ultimate goal of her existence.** The attempt at deification of Adam and Eve not only failed but following the universal laws of causation, it brought about *the loss* of all supernatural virtues granted gratuitously by God to the human nature. The defiance of God's precept (expressing the true and natural relation between God and mankind) deprived humanity of happy and misery-free terrestrial life, the terrestrial 'immortality', an easy and painless way to obtain the celestial happiness of participation in God's glory, the visible and easy way of communication with God, the strong orientation of human intellect towards the truth and firm disposition of the will towards all what is good and truly beautiful. This original and fundamental sin didn't however destroy the essential powers, functions and qualities of human nature i.e. the inborn consciousness, rationality, internal freedom of choice and actions, creativity, uniqueness and innate orientation of human soul towards the ultimate, eternal and *bipolar goal of human existence*; namely, the inborn disposition of human soul opened towards the eternal participation in God's happiness or towards the eternal separation from that happiness and glory. The choice and realization of this ultimate goal depends on moral and religious quality of individual life.
- (4) **Jesus Christ, his messianic life, expiatory death on the cross and the impact of his resurrection on human destiny.** St. Thomas and his

school, inspired by the teachings and deeds of Jesus Christ, the faith and heroic testimony of the Church (especially that of St. Paul and martyrs), the universal Christian tradition, and supported by the solid philosophical and theological truths, uphold the uniqueness of Christ's gospel, the *expiatory* character of his life and especially of his human *death on the cross* (the highest act of *love for humanity* and the act of *atonement for all human sins*), the historicity of *Christ's resurrection* as a clear proof of *Christ's divinity* and the *redemptive significance* of his terrestrial life for the whole of humanity. I think there is no exaggeration if we say after the American Christmas song entitled "Joy to the world", which states that, "**Twenty wild centuries have come and gone and today He <Jesus Christ> is the Centerpiece of human race, the Leader in the column of human progress. It can be said that all of the armies that ever marched, all of the navies that ever sailed the seven seas, all of the legislative bodies that were ever set and all of the kings that ever reigned, all put together, have not affected the life of man on this earth so powerfully as that one solitary life**".

- (5) *The eternal salvation or the eternal perdition after death*. St. Thomas and his school state after Christ, the four gospels and other holy scriptures of the New Testament, the faith and traditional teachings of the universal Church that our individual and eternal destiny, i.e. the attainment of individual salvation ("eterna visio beatifica") or acquisition of the state of eternal deprivation of participation in the eternal happiness and glory of God is a real possibility and depends on the religious and moral quality of our terrestrial life. The hell i.e. the state of deprivation of the eternal beatitude is characterized by condemnation to the eternal sufferings due to absence of any good, love, joy, mercy and anything what can be named 'happiness' ("eterna perditio"). The state of eternal salvation or that of eternal perdition after death is a natural effect (reward) of individual choices, personal decisions, right or false faith, proper or improper efforts, beneficent or maleficent, benevolent or selfless deeds of individual human person during the life on the earth. It is not true that God will use force and will condemn the evildoer to the eternal doom of perdition! *The evildoer* through his own free and conscious decisions and deeds ignores God, rejects His grace and love and *is himself preparing his own eternal state in accordance with the universal and impartial laws of the justice, retribution and divine grace*. The divine glory is nothing else than a manifestation of the universality, inviolability, invincibility, effectiveness and impartiality of God's justice, His gratuitous *yet not forced love and His grace of salvation*. Our eternal salvation however is realized neither against our free will nor against God's universal laws of order, love, grace, justice, compassion etc.

(2006年12月5日受理)